



もど子と人婦

號貳・第卷六第

もど子

金の手斧きんの手て

やまとの翁

むかし、まづある處ところに、ごくく正直しやうじきな、樵夫せうとが居をりまし  
たとさ、毎日まいにちく、山やまへ行いつて  
は、鐵てつの手斧てでもって、ちよん  
くちよんくと木きを伐きつて居ま

りました。

二

ある日のこと、この樵夫、名前は正助といふのですが、いつもの山へ行つて、河の側で、ちよんくちよんくと木を伐つて居ました所が、ひよつと間ちがって、其手斧を河の中へ落としてしまいました。

手斧は重いもんですから、すぐ、ぶくくくと水の中へ沈んでしまひました。さあ、正助は、困りました。大事の大事の手斧をおとしてしまつて、もう、これから、木を伐つて働くこともできませぬ、そうすると、家に居る年老つたお母さんや、小さい太郎さんや、お玉さんに御飯を食べさせて行くこともできませぬから、正助はさあ、どうしたら宜いかと、いろいろ考へて見ましたが、

どうにもする事が出来ませぬから、一人其處に座って、泣いて居りました。  
しますと、其河の中から、一人の美しいお姫様が、ぽーっと出て来て



「お前、何故泣いてるの？」

といってくれましたから、正助は

「へい、たった今大事のく手斧をこの河の底へおとしてしまひましたので、これから、木を伐ることができませぬから、家のお母さんや、弟の太郎さんや、妹のお玉さんを養って行くことが出来ないと、どうしたもんだらうと、つらくつくしかたがないのです」

と言ひますと、お姫様は

「おや、そう?! じゃ泣くのはお廢し、私が今とてきて上げるから」といって、

見て居る中に、水の中へもぐって行って、ひかくする

金の手斧を取って出て来て、

「お前の落したといふのは、これなの？」

と、いって見せましたので、正助は

「いや、私のは、そんなに立派なんじゃありません」

と答へますと、お姫様は、又ぎぶつと這入って行って、今度は眞白な銀の手斧をもって出て来て、

「ではお前の落したといふのは、これ？」

と、いって見せますと、正助は又

「私のは鐵のです、そんな立派なんじゃありません」

そこで、今度目、お姫様が這入って、取り出して来たのは、

丁度、正助の落したといふ鐵の手斧でしたから、正助は、お姫様

は大層御禮をいって、その手斧を貰らひました。すると、お姫様

は  
お前は、中々正直だから、この金の手斧も、銀の手斧も、私から上げませう、これを賣るとお金ができるから、それで、お母さんや、小さい子供たちを樂にさせることができませう」といふかと思ふと、奇麗なお姫様は、水の中へ消へて仕舞ひました。

それから、正助は、金と銀との手斧を賣りに行きました、大層なお金を儲けたもんですから、お母さんや子供たちに、美しい衣服や食物や、奇麗な御本などを澤山お土産に買つて参りましたとさ。しますと、この話を聞きつけたのが、隣りの慾深老爺です。正助

の奴、甘い事をした相な、よし／＼己も一番金の手斧を貰つて来よう、と獨り考へながら、ある日のこと、其川のふちへ行つて、自分の手斧を出して、ちよいと木を伐る眞似をして、態と夫を川の中へどぶんと落してしまつて、そしてわあ／＼大聲を上げて泣いて居ました。

すると、其聲を聞いて、美しいお姫様が、片手に金の手斧を持ちながら、水の中から、出て来て、

「お老爺さん／＼お前さんの落した手斧はこれなの？」

と見せました。お老爺さんは、「そらおいでなすつた」と思ひながら、いきなり

「はい、はい／＼それが、この老爺ので」

と、いって、**兩手**を伸ばして取りに行きますと、お姫様は、

「あら、そうじゃない

でせう、このお老爺さ

んは嘘ほつかし!!!

と仰ったまんま、其金

の手斧を持って、また

斧までも失ってしまったとさ。



水の中へ這入って仕舞

ひました。

で、この慾張老爺さん

は、金の手斧を貰へな

かった許りか自分の手

めでたしく